

四 社会進出をめざす女性に伝えて

1 大学の揺籃期とその基礎

(1) 大学新設の機運

昭和三十年代後半の日本は、池田勇人内閣の所得倍增政策による経済力の増進を背景に、東京オリンピック開催に象徴される飛躍繁栄の時代を迎えていた。国民経済の成長は、高等教育への進学志向を高めるとともに、後に団塊だんかいの世代とよばれる、昭和二十二年（一九四七）から二十四年（一九四九）の間に生まれたベビーブーム世代の波の高等教育への到来を目前にしていたのである。

大学・短大等の高等教育への進学率が当該人口の二〇%を越えるのは、昭和三十八年（一九六三）のことであり、ベビーブーム期における高等教育の在学者は、その直前に比べ、一・五倍近くに達することになる。なかでも、女子学生の進学率は著しく、四年制大学において女子学生の在学者数が一〇万人を超えたのは、昭和三十六年（一九六

一）のことであつたが、昭和四十一年（一九六六）には、一七万人に達するにいたる。

このような時代の趨勢すうせいにあつて、文部省は、昭和三十八年四月、高等教育研究会を設置して、大学生急増対策を始めるなど、高等教育の量的拡大の現実的対応に乗りだしていた。

時あたかも、跡見学園は、明治八年（一八七五）神田中猿楽町の地に、跡見学校として開業以来、昭和四十年（一九六五）には、開学九〇年を迎えようとしていた。昭和二十五年（一九五〇）、新制の学制整備とともにいち早く発足した跡見学園短期大学も歴史を重ねて、その内的発展として、跡見の長い伝統を基盤に新たな時代の要求にふさわしい四年制大学を設置しようという機運が醸成じょうせいされつつあつたのである。

(2) 新座校地の由来

跡見学園の大塚（茗荷谷）校地には、中学、高校、短大の校舎、運動場、および学校法人跡見学園の



管理棟があった。昭和二十九年（一九五四）には地下鉄丸ノ内線が開通、茗荷谷駅ができ、通学にはいつそう至便の地となっていたが、新たに大学を構想するには、設置基準を満たすだけの面積はなく、その実現には、ほかに土地をもとめなければならぬ状況にあった。

学園の所有地としては、浅間牧場近くに演習林と、合宿舎（現在の北軽井沢研修所）、それに鶴原の臨海寮（現在の鶴原寮）等があったが、いずれも遠隔の地である。

幸い、学園は、東武東上線の成増駅と大和町駅（現在の和光市駅）とのほぼ中間

熊野神社

社殿の左手高台にみえるマンシヨンの地から向うに白子農園が広がっていた。かつて花蹊は、次のような歌を詠んでいる。

学制頒布五〇年記念に際して賞状を贈られし時生徒の父兄方また交友有志より白子の里なる新美に遊園地を贈られければ
 生ひ初むる白子の里のをしへ草やまよにしきの花よさかなむ
 同じところに記念の松を植ゑける日（二首）
 けふ植ゑし新美の松よ日の御子のちよにならひて千代もさかえむ
 三熊野の神のこころにかなならむ新美の松のけさのしら雪

にあたる埼玉県大和町白子の地に、農園を所有していた。

その由来は、大正の昔にさかのぼる。学祖跡見花蹊は、大正十一年（一九二二）十月三十日、学制頒布五〇年記念祝典に際し、当時、大正天皇にかけわり政務をとっていた摂政宮（のちの昭和天皇）より銀杯を拝受するとともに、文部大臣から金牌と銀製のカップおよび表彰状を受け、さらに東京市教育会からも市内教育功労者の表彰を受ける。その栄誉に対して、在校生保護者が発起人となり、花蹊老後隠棲のための土地購入事業が計画されたのである。

その結果、埼玉県北足立郡白子村に四五〇〇坪の地が得られ、大正十三年（一九二四）一月十六日の登記完了を俟って、花蹊に贈呈されたが、花蹊はただちにそれを学校へ寄付したのである。時に花蹊八五歳のこと。その地は、将来、校舎・寄宿舎を建てる予定であるが、しばらくは運動場として活用するつもりであることを、財団法人代表理事である跡見李子の名義で当時の白子村村長あての書類を提出している。

以来四〇年。戦中から戦後にかけては、学校農

園として長く活用されてきたところであったが、戦後の農地調整法改正(第一次農地改革)にあつて、一部農地解放の対象となり、三九九三坪ほどになつていた。したがつて白子の地もまた、周辺の土地を取得購入しなくては、大学校地として十分な広さとはいえない問題を抱えていた。

ところが、昭和三十七年(一九六二)六月十五日、埼玉県知事より、道路建設用地として、この白子農園を横切るかたちで、土地買収が求められることとなつた。校地面積が減少したばかりではなく、その形状が二分され、学校用地として利用価値を著しく失うこととなつたのである。

かくして、昭和三十七年十二月二十日に開催された第五九回理事会並びに評議員会は、「法人所有学校用地一部処分に関する件」を議して白子の地を手放すことを決断することになつた。と同時に「学校用地購入に関する件」を議して、時の理事長飯野保は、その提案理由として、現有校地のうち、運動場として使用しうる地がわずかであることにあわせて「短期大学三科のうち何れかを近き将来四年制大学に昇格する要求も盛んとなつて来、大学設置基準の命ずる校地面積に相当する土

地をなるべく速やかに入手する必要も生じてきました。」と述べている。

翌昭和三十八年三月、白子の地二万四五百平方メートル(約四〇〇〇坪)のうち、第一次処分として一六五〇平方メートル(約五〇〇坪)が国道浦和田無線道路用地として公用供出され、ついでこの年のうちに第二次処分三三〇〇平方メートル(約一〇〇〇坪)、第三次処分八二五〇平方メートル(約二二五〇坪)が、道路提供のために農地を失つた地元の人々および一般に提供売却された。第三次処分では大半の面積がペプシコーラの所有に帰することとなつた。このようにして供出された土地は、昭和三十九年(一九六四)十月に開催されたオリンピックにむけての道路交通網整備の一環となり、聖火ランナーが駆け抜けて以来、オリンピック道路とよばれるようになった。

迦^{そま}及の地、白子農園は、現在の笹目通りと川越街道の交差する和光陸橋に近い北側に位置していた。その地域は、川越街道の旧道に隣接する熊野神社の背後の台地に、かつての埼玉県北足立郡大和町大字白子座字宿上の地(現在の和光市白子二丁目)から、道路をはさんだ大和町大字下新倉字

浅川の地(現在の和光市丸山台三丁目)まで広がっており、かつては、農園をめぐるように木々が植えられていたという。前者が第三次処分、後者が第二次処分の対象となった地である。

白子は、昔から、名水の湧出する地として知られ、かつては酒造工場などもあり、ペプシコーラ



空からみた新座キャンパス(中央左下、丸い部分)の昔(国土地理院 空中写真 USA10KKT, 志木 R741, 65)

は、その水に目をつけたものと思われる。その工場も現在はマンシヨンに姿を変えて、川越街道旧道沿いの桜の老木が昔の名残をとどめている。

白子の地を失ったことは、学園にとって痛手であったが、代替用地として、同昭和三十八年のうちに、埼玉県北足立郡新座町大字大和田の地に、四万九千九百三十九平方メートル(約一万五〇〇〇坪)の用地を取得することができるようになったのは幸いであった。大学設置構想に現実的な可能性が開けてきたからである。

(3) 新座校地とその整備

白子農園の代替として取得することになった新座校地は、どのような地であったか。

第二次世界大戦後、駐留米軍によって撮影された空中写真が、国土地理院に残されている。写真は、昭和二十二年(一九四七)十二月二十九日、撮影されたものである。

右斜め下方すなわち東南方向から、左斜め上方すなわち北西へと川越街道が延びている。東南方向にみえる集落は、かつては江戸と川越の往来に宿場町として栄えた大和宿である。南(写真下方)から北(写真上方)へと流れる柳瀬川(梁瀬川)

中野富士。左手後方は四号館



「尔比久良堅穴住居群址」。碑文には、下のよつに記されている。



尔比久良堅穴住居群址

此の碑の後方地区東西 50 m、南北 80 mに亘り、縄文中期 5、弥生時代 1 の複合堅穴住居群が発掘された。1963 年 12 月、大学構地造成の為旧耕地削工事実施中、たまたま石器時代土器の出土を契機として急遽工事を中止し、立正大学考古研究室に発掘調査を委嘱した。その成果が上掲 6 住居址の完掘と炉のみのもの二例が検出され、夥しい石器土器類の出土を見た。研究精査の報告は出版・学界社会に貢献した。石器土器類は大学に保存展示し、遺跡はビニール被覆の上盛土し、原形の儘再調査可能な姿で地下に保存されている。

1980 年 3 月 26 日
跡見学園女子大学

れる富士信仰の塚が今も残り、歴史的にも由緒ある地であることが知られる。

この新座の地を、飯野保理理事長以下学園の首脳が初めて視察したのは、昭和三十八年（一九六三）十一月九日。その後、ただちにそれまでの農地を校地へと造成する第一期工事にとりかかったが、十二月初旬、再びその地を訪れた飯野理事長は、そこに縄文土器の破片が散乱しているのを認めた。そこで、工事を一時中断して、発掘調査を依頼することとなった。

は、遠く多摩湖の地下を水源とし、やがて荒川へと合流する。街道が柳瀬川水域をこえ、野火止段丘と向かい合う武蔵野段丘に円形の樹林に囲まれた一帯がある。これが、後に跡見学園女子大学の校地となる姿である。柳瀬川流域の沖積低地は肥沃な農地として早くから開け、武蔵野段丘は背後に富士を見はるかす地であつて、中野富士とよば

キャンパスから出土した縄文土器

新座校地の整備に際して出土した文物は、現在、花蹊記念資料館に収蔵されている。写真右手は縄文中期深針形土器。左手は、縄文中期加曾利E式土器で、第三期の校舎落成の際、笠間焼の複製が記念品として作成され、



今、二号館の前庭、合宿舎の玄関前に、「尔比久良堅穴住居群趾」と題する碑文が残されている。そこには、この間の事情が別掲のように記されるとともに、発掘された住居群趾の位置が図示されている。

この調査にあたったのは、当時、立正大学の講師であった坂詰秀一であつて、十二月十五日に踏査をした坂詰は、ただちに従来知られることのなかつた集落遺跡であると判断し、

十二月十六日から二十三日までの八日間、緊急発掘を行ったのである。その結果は、謄写刷り報告書として学園に提出されたが、後に『新座―北足立郡新座町大和田跡見学園女子

口上を付して関係者に配付された。



口上

一、縄文時代中期の土器の小甕(摸)

昭和三十八年十二月、女子大学構内土地造成工事中、縄文、弥生時代の住居趾を発掘し、おびただし

い石器、土器が出土しました。この地は、埼玉県梁瀬川に沿った丘陵、清い湧水がある南斜面住居に好適の地と、古代人が集落を営んだ蹟でした。いま、大学校舎第三期工事の竣工を機に、出土の縄文中期加曾利E式土器の一つを、笠間の松原佳山氏に囑し、実物大に摸して製作し、記念におわちすることになりました。

昭和四十三年十一月

跡見学園

大学構内遺跡の調査―(吉川弘文館 昭和四十年六月十五日)として刊行され、新座遺跡として広く知られるようになる。

この校地第一期の基本的諸工事は、翌昭和三十年三月に終わる。引き続き、校地第二期工事にとりかかり、七月二十一日に、陸上競技のための一〇〇メートルと二〇〇メートルのトラックと跳躍用走路をもったフィールド、リフトグラウンド、テニスコート(硬式用一面、軟式用三面)、バレーコートが設けられ、木造モルタル二階建て四一七平方メートル(二二六坪)、五〇名を収容する合宿舎が併設されて、運動場としての整備をみるのである。

(4) 大学設置の策定から設置申請へ

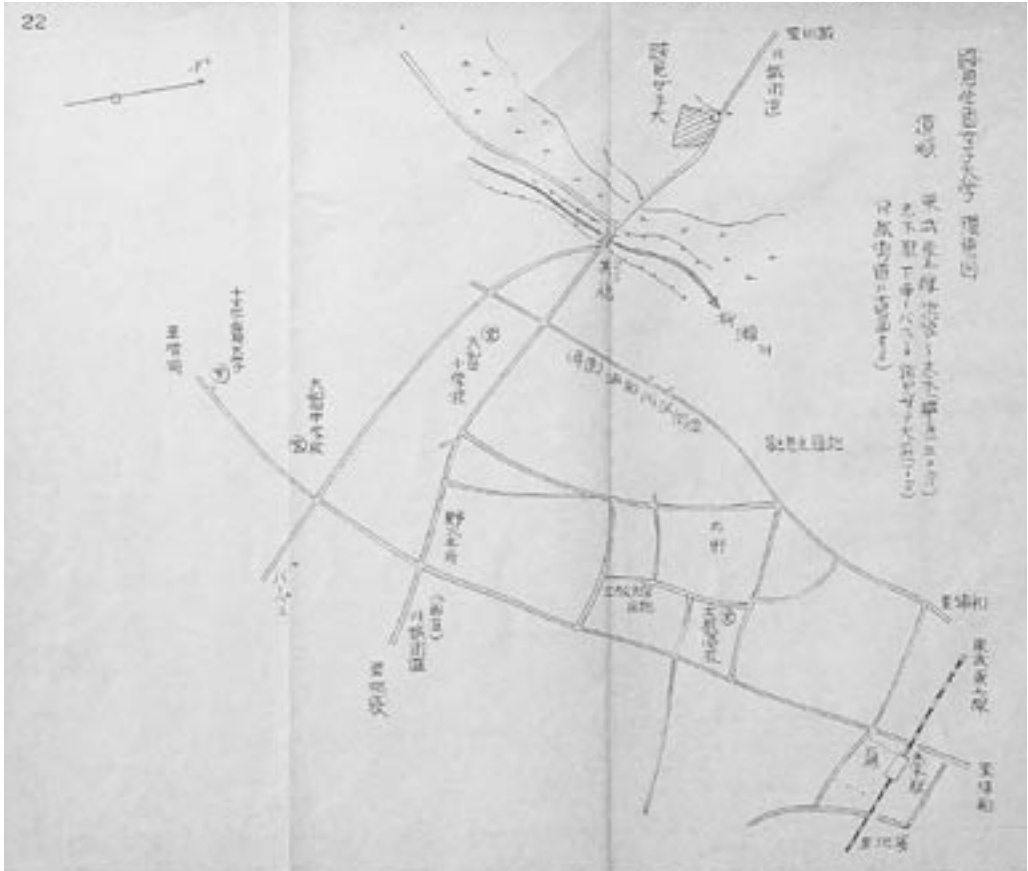
学園は、昭和三十八年(一九六三)六月十九日付文官報第一七四号により、文部省に九月十八日に、昭和四十年より大学(文学部定員一〇〇名)の新設予定を内容とする大学設置計画報告を提出している。それは、白子の地を売却し、新たに新座の地の取得購入を決定した、まさにその時期にあたる。

この間、新座校地は、運動場として整備された

が、学園首脳は、これを機に、ここをキャンパスとして、跡見学園女子大学設置構想の検討準備に着手していたと判断されるのである。しかし、当時の飯野保理事長が、跡見学園女子大学設置の構想を学園内部で発表し、その具体化作業に入る指示をしたのは、昭和三十九年(一九六四)七月のことであった。翌春の開学まで余すところ九か月前のことである。

昭和三十九年九月二十六日、跡見学園会議室において、第六六回理事会が開催され、議案「四年制大学設置に関する件」の議案が上程された。席上、飯野保は、提案の理由として、次のように述べている。

本件は早くより、学園内外関係者の間に置いて要望されて居たものであるが、最近に至り、学園自らの力もこれを実行するに耐え得るものと認められ、客観的事情も亦これを促す趨勢にあるため学園は過般来担当役職員をして文部省当局と連絡せしめ、本件の下準備を致してきた。学園が、既設中学校・高等学校・短期大学に加え更に大学を設置するこ



とは、跡見九〇年の歴史を一段と光彩あらしめるのみでなく、女性の学識教養を高め、社会に益するものなるを思い、全面的御賛同と御支援を得て、実行いたしたい。

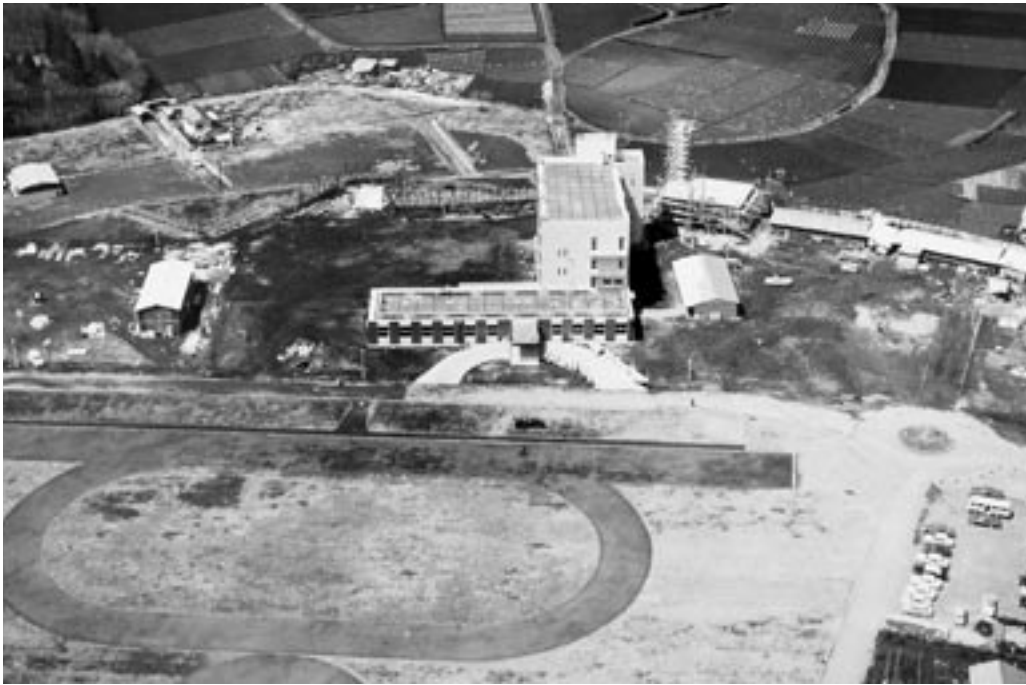
その結果、大学設置議案は、出席理事一〇名（一名欠席）全員の賛意のもとに、議決され、九月三十日、跡見学園女子大学設置認可申請書が、時の文部大臣愛知揆一に提出された。

同年十一月九日には、大学設置審議会委員の査察、十二月十八日に内示があり、翌昭和四十年（一九六五）一月二十五日、跡見学園女子大学は設置が認可されることになった。

その内容は、定員文学部国文学科四〇名・美学美術史学科四〇名（収容定員各二六〇名）、修業年限四年、開設時期昭和四十年四月一日、開設場所埼玉県北足立郡新座町大和田二六六二、とするものであった。

(5) 校舎建設と増築整備

昭和四十年四月開学の発表ののち、関係者は、短時日のうちに、校舎計画を鹿島建設との間でまとめると一方、設置基準に不足する用地、道路の間



題について、新座町、県当局と折衝、特に種々の問題解決については、新座町に多くの協力を得た。その一方では、文部省大学術局、管理局所管系の指導を受けるなど、奔走の日々がつづいたわけであった。

かくして、昭和三十九年十月八日に鋳入式が挙行される運びとなる。これが、校舎建築の第一期工事の始まりであって、以降、昭和四十年代における校舎工事は、四期にわけて進められるので、その歴史をあらかじめ整理しておけば、次のとおりである。

第一期の開学にむけての校舎建築が、鉄筋四階、講義室・実験室二六三〇平方メートル(七九七坪)、研究室を含む管理棟二一八平方メートル(六七坪)の第一期工事として完工するのは、昭和四十年三月、大学の四月開学を直前にしてのことであった。開学後は、ただちに第二期工事へと取りかかる。それが、鉄筋五階、六五〇名を収容する講堂・講義室・演習室など五八七一平方メートル(一七七九坪)の第二期工事として完工するのは、昭和四十一年(一九六六)三月。さらに、第三期校舎増築工事、鉄筋五階、二〇〇名定員の併設食堂ホールを含む二六七二平方メートル(八一〇坪)が完工するのが昭和四十三年三月。ここで、コの字形の初期の校舎工事は一段落する。ついで、文化学科の増設にあわせて、第四期校舎増築工事が行われ、鉄筋五階、一階会議室、二・三階図書館、四・五階講義室八の二二〇七平方メートル(六六九坪)が完工するのは、昭和四十九年(一九七四)三月のこととなる。

ここに至って、現在の一号館の原形が完成することになるのである。



(6) 大学開学と第一回入学式

昭和四十年（一九六五）四月一日、跡見学園女子大学は開学の日を迎え、その歴史の幕を開く。

当時の学則の第一条には、本学設置の目的について、次のように謳っている。

本学は跡見学園女子大学と称し學術の中心として広く知識を授けると共に、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道德的および応用的能力を展開させることを目的とし、学園創立者跡見花蹊の教育精神を継承して有能なる社会人、家庭人たる女性の育成を使命とする

これは、認可申請書の「目的及事由」に記された文章の冒頭に「本学は跡見学園女子大学と称し」を加えたものである。

開学を前に作成された「跡見学園女子大学入学案内」（一九六五年）では、本学の特徴として「好適なる教育環境」「堅実な教育伝統」「清新な教育精

第三期工事が終わった頃のキャンパス風景。校舎と管理棟がコの字形をなしている。左手に見えるのは新座寮。またその手前は、現在も体育館の横に残る合宿舎。

神」「特殊な教育課程」「優秀な教授組織」「安全な施設設備」をあげている。

いま、「特殊な教育課程」の項を掲出すれば、次のとおりである。

一般教育と専門教育の偏重をさげ、あくまで円満な人間形成を可能とする学科目組織を行った。特に専門科目は豊富かつ精彩特色あるものを開講している。教授と学生の人間関係において、学問がとすれば人間を阻害することを慮って、その交流に考慮をはらった。更に学科相互における学科目の自由開放による選択履修を許していることは、自覚的人間形成の場として考慮に立つものである。

右に述べられるところの、たんなる知的伝授ではない、円満な人間形成をめざす教育課程上の工夫は、「学科の概要(一般教育)」の項でも、「学科目を一般教育と専門教育にわかち」、一般教育科目においては、「人文、自然、社会の三系列にわたって、かたよらない知識を授け、円満なる人間形成の上に立ち」、「専門分野の研究に入らしめよ

うとする」。本学園の伝統として、一般教育を特に重視し、各系列の学科目については、「特に女性としての人格形成の上に主要なる科目を選んで開設し」、「例えば、統計学、生理学、家政学をおいた」とあり、また「外国語科目は、特に単位を多く開設して、履修せしめ」「国際的視野、立体的思考に役立たせ」、「進んで専門科目におけるよき成果を期待した」とあることと符節を合わせる。

国文学科の設置目標について、日本の近代は、西欧文明を輸入消化することによって建設されてきたが、これからの日本文化は、風土の伝統のうえに立たなければならぬ。このような時代にあつて、伝統と現在が生んだ日本の文学の研究は、「最も緊要事」であると述べ、そのために、「日本文学を流れとしてつかみ」、「時代における作品と作家を究め」、「国語の変遷を考え、現代語の究明に進み」、「日本文学の世界文学における位置を明らかにする」使命のもとに、教育陣容を整えたとする。

美学美術史学科の設置目標と教員・開設科目の特色については、「美的現象を人間存在との関連において考察する美学」と「芸術作品の歴史的背

第一回入学式風景



開学当初の教員集合写真



景をたずねる美術史」、それに「近代における多様な展開をたずねる造形、音楽学、文芸など各芸術ジャンルの理論」とを「相互に関連性をもたせ

つつ追求」し、「今日における芸術の存在意義と、その展開方向を明らかにしようとする」と述べている。

当時の大学設置基準に沿いつつ、教養教育を重んじ、個性ある専門内容を盛ることによって、長きにわたる跡見の伝統を、大学においても生かしてゆこうとする姿勢を打ち出そうとしたものである。

このような大学設置の目的と使命のもとに、学長に飯野保、学監に伊藤嘉夫、文学部長に柳田泉、国文学科主任に中島悦次、美学美術史学科主任に今泉篤男、一般教育主任に石山乾二、図書館長に伊藤嘉夫、という教員組織を構えたのである。

四月九日、第一回教授会が開催され、第一年次要員、一四名全員が出席、入学式の要領や組担任の決定をみている。

四月十五日、記念すべき跡見学園女子大学第一回入学式が挙行される運びとなる。

新入生たちは、紅白の幔幕が張られた管理棟にいたる砂利道を踏んで、現在の一四〇二講義室を会場とする入学式に臨み、ここに国文学科一七〇名、美学美術史学科一六〇名が栄えある第一回生



となるのである。

(7) 開学式の挙行

昭和四十年（一九六五）四月一日に跡見学園女子大学は開校したが、その開学の式典は、第二期工事の完工による講堂の完成を俟ち、翌昭和四十一年（一九六六）十月二十八日に挙行された。その準備と運営には、教職員だけでなく学生たち全員があたつて、喜びの日を迎えたのである。

式典は、四階講堂（現一四〇三教室）を会場として、午前一一時から始まった。出席者は、官庁・大学関係者、高等学校長、学園の特別関係者、法人役員・PTA・後援会役員・校友会常任幹事、学園関係者、新座の地元役職者、地主、近隣の人びと、新聞社関係に、学園各校の教職員代表、さらに学生・生徒代表など二二〇名に及んだ。

その式次第は、次のとおりである。

開学式次第

- 一、開式のことば
- 一、国歌斉唱
- 一、学長あいさつ
- 一、来賓祝詞
- 一、教授代表あいさつ
- 一、学生生徒代表祝詞
- 一、感謝状贈呈
- 一、記念歌 紫の一もと 斉唱
- 一、校歌斉唱
- 一、閉式のことば

来賓祝詞は、時の埼玉県知事栗原浩、立正女子大学・立正学園女子短期大学学長金子日威らが述べ、学生代表祝詞は、跡見学園女子大学学生を代表して栗原契子が喜びにあふれた祝詞を述べた。さらに跡見学園高等学校生と跡見学園短期大学生を代表して佐藤ゆう子が祝詞を述べた。

式典ののち、祝宴が開かれるとともに、花蹊の遺作と校内出土品の展示室が用意され、参加者には、跡見学園女子大学を紹介するリーフレットのほか、記念品が配布された。

式典におけるハイライトは、この日のために歌



唱指導をうけた学生たちによつて披露された記念歌「紫の一もと」の斉唱である。高い格調と雅趣をたたえた「紫の一もと」は、この時から今日にいたるまで、学歌として長く歌い継がれることになる。作詞は、伊藤嘉夫、作曲は、明本京静。

に満ちた大学の讃歌として、跡見の歴史とともに残るにふさわしい歌であることが知られよう。

(8) 英文学科の増設と教職課程等の設定

当初、跡見学園女子大学は、昭和四十年(一九六五)四月開設を目的として、文学部国文学科、美学美術史学科とともに、英文学科の設置を構想し、施設、設備、図書等も三学科体制にふさわしく準備を進めていたことが知られる。ところが、英文学科については当初計画どおりには運ばず、昭和四十年度は、国文学科、美学美術史学科の二学科を開設したという経緯があった。もともと三学科のために施設設備等の用意をする予定であったものを、年次計画を繰り上げて整備し、教員採用予定をも繰り上げて、二学科完備の体勢で臨んでいたわけであるから、英文学科の増設は、大学の初期構想にあり、その教育目的の実現のために、開学後、ただちに増設の申請が行われることとなった。

と同時に、教職課程の設定をも行うこととなった。教職課程の設定については、開学後の年次の進行中にこれを設けることが構想のなかにあり、教職専門科目の授業科目の開設と専門教育科目の

開設授業科目が定められ、三学科それぞれに教職免許状の取得が可能となるよう、英文学科の増設と軌を一にして、その実現をはかることになったのである。

女子大学の昭和四十一年（一九六六）九月九日定例教授会は、「英文学科増設並に教職課程設定のための学則改正に関する件」を、海外出張の一名欠席のほか全員出席のもとに決議し、それをうけて、法人理事会は、昭和四十一年九月二十七日、跡見法人会議室で、理事長飯野保以下一三名（委任状二名）全員賛成により、この二件は、同月付で、当時の文部大臣有田喜一に、届出書が別紙書類とともに提出されたのである。

その結果、昭和四十一年十二月二十六日付（校大第一〇〇の一〇三号）で、文部省大学学術局長名による「昭和四十二年度学科増設に関する届出について（通知）」の届出受理の通知があり、ここに、英文学科の開設が決定し、名実共に、新生跡見学園女子大学の実現の運びとなったのである。

英文学科の専門科目担当の専任教員として申請書にあがっているのは、教授としては既に就任し主任となる堀江清弥のほか、昭和四十二年（一

九六七）就任予定者として左右田実・平野金之助らがあり、講師には既に就任していた宮田実のほか、昭和四十二年就任予定者として藤本民雄・後に学長となる飯島周らがあるが、兼任・兼任についてはこれを省略する。

また、昭和四十二年三月二十七日には、教育職員免許状取得のための資格課程設置が認可されている。

かくして、昭和四十二年四月一日には、あらたに英文学科を加えて、中学校教諭一級普通免許状・国語・美術・英語、高等学校教諭二級免許状国語・美術・英語の資格課程をも備えた、跡見学園女子大学の当初計画が実現するのである。

なお、昭和四十五年（一九六九）四月には、高等学校教諭二級免許状書道の課程の認可をも受け、さらに昭和四十七年（一九七二）四月からは、その対象範囲を聴講生にまで広げる設置認可を得るにいたっている。

(9) 学術刊行誌の開始とその歴史

大学の開学は、教育とともに教員の研究研鑽（けんさん）の場の出発でもあった。教員は年度の進行によって次々に赴任する計画であって、初年度の専任教員



大学紀要と各学科学術誌の創刊号

は、一四名であったが、昭和四十年（一九六五）七月の教授会で、学術研究の発表の場としての紀要の発行が決定されている。

実際に紀要編集委員会が設置されて、『跡見学園女子大学紀要』が創刊されるのは、国文・美学美術史・英文の三学科がそろった三年目の昭和四十三年（一九六八）三月十五日である。以後、文学部が新たな組織改変を遂げる直前の、平成十四年（二〇〇二）三月十五日発行の第三五号まで、数多くの学術成果を発信することになる。

この大学紀要は、翌平成十五年（二〇〇三）三月十五日には、『跡見学園女子大学文学部紀要』と名称を変更し、通巻三六号として継続される一方、あらたに『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』が創刊されることになる。やがて、教員主体の学術誌としての紀要だけではなく、昭和四十八年（一九七三）には、国文・美学美術史・英文の三学科が足並みをそろえて、学科

主体の雑誌を刊行する。

『国文学科報』は、跡見学園女子大学国文学科を発行者として昭和四十八年三月一日の創刊。特集として〈卒業論文〉を掲げ、昭和四十三年度から昭和四十六年度までの卒業論文一覧を掲出している。二号以下は、教員の論考と優れた卒業論文を中心に掲載して、三〇号に及んだ。その間、発行主体が跡見学園女子大学国文学会に変わっている。平成十四年（二〇〇二）三月十八日発行の最終号には、一号〜三〇号の総目次を掲載している。

『美学・美術史学科報』は、跡見学園女子大学美学美術史学科発行の学術雑誌で、昭和四十八年三月十日の創刊。平成十四年三月十五日刊行の第三〇号をもって、終刊を迎えている。

『ゆべにりあ』(JUVENILIA)は、跡見学園女子大学英文学会を発行者として昭和四十八年二月五日に創刊号（一九七二度版）を刊行する。JUVENILIAは、「わこうどの文学」を意味するラテン語。教員のみならず若い学生たちの論を掲載して、昭和六十一年（一九八六）三月十日の第一四号まで続く。昭和六十二年（一九八七）三月に、誌名『英文学科報』と改称し発行、さらに昭和六十三年三月から

紫の花。古代の紫色は紫の根から抽出された。



第一回紫祭パンフレット



あらたに『跡見英文学』創刊号を発行、平成十四年(二〇〇二)三月十日刊行の第一五号(二〇〇一度版)をもって、終刊を迎えている。

昭和四十九年(一九七四)に開設された文化学科では、昭和五十三年(一九七八)三月の第一期生の卒業と同時に、跡見学園女子大学文化学会が設立され、その活動の一環として、昭和五十八年(一九八三)三月二十五日に『フォーラム』の第一号を創刊する。毎号、小特集を組んで、編集し、フォーラムにふさわしい場とするところに特色があった。この雑誌もまた、平成十四年(二〇〇二)三月二十日に第二〇号をもって終刊を迎えている。

また跡見学園女子大学一般教育を発行母体とする『研究報告 跡見学園女子大学一般教育紀要』は昭和六十年(一九八五)三月十五日に第一号が出たが、平成元年(一九八九)三月十五日発行の第五号で終刊となった。

教員の研究業績は、昭和五十七年(一九八二)発行の『跡見学園女子大学紀要』第三五号から、「研究活動報告」として掲載されていたが、翌昭和五十八年から『跡見学園女子大学 学術年報』として、単行の冊子として出されている。

平成十四年に既存の四学科を統合し、文学部人文学科として一元化し、臨床心理学科を併設、さらにマネジメント学部マネジメント学科を新設し、新体制になるとともに、それぞれに終刊号を迎え、それぞれに新たな学術発信の時代を迎えることになるのである。

(10) 紫祭の誕生

開学は、無からの出発であった。学生たちは、跡見学園の伝統を継承しつつ、茗荷谷キャンパスとは離れた新座キャンパスにあつて、自由で進取に富んだ新たな大学の雰囲気創造者となった。

昭和四十年(一九六五)六月二十二日には、早くも学生会が結成されて、自主的な活動を開始していたが、英文学科も開設された昭和四十二年(一九六七)にいたって、初めて大学祭が開催された。

その前年には、サークル発表が行われ、それを土台として、ゼミやクラスも加わる全員参加の大学祭を望む声の高まりに、実行委員会が結成され、第一回紫祭(ゆかりさい)が開催の運びとなったのである。

この準備段階において、大学祭に名称をつけようという学生たちの強い要望に、実行委員会は各

第一回の「統一テーマ」を掲げた
立て看板



クラスから出された案をまとめ、アンケート調査の結果、「紫祭」に決まったのである。それは、学祖跡見花蹊しげけんこうたけいが昭憲皇太后より制服の袴の色に紫を賜ったことから紫をスクールカラーとしたこと、新座キャンパスのある武蔵野の地に、紫草、異称ゆかりの草が咲いていたことから、学生たちの間から出てきた名称であった。当時のパンフレットには、紫をゆかりと異名で用いてきた例として、次の歌を載せている。

紫のゆかりの草をとひわびて露わけそむる

武蔵野の原

(新葉)

武蔵野のゆかりの色もとひ陀びぬみながら

霞む春の若草

(新統古今)

当初、教授陣の間には、「紫」を「ゆかり」と読むことに学術的な根拠がないと危ぶむ声もあったが、再度のアンケートで、七五%の学生が「紫祭」を支持し、「ルビを付けない」という条件のもと、「紫祭」が正式名称として決定したのであった。

第一回紫祭は、昭和四十二年十一月十日午後を

前夜祭として、十一・十二日の二日間にあつて開催された。統一テーマ・アピールには、「考えよう！ 私達の大学を 私達のなすべきことを

自己と社会の発展のために」が掲げられた。当時の学生たちの意欲と志が伝わってくるアピールである。ゼミナル・クラス・サークル等の企画による展示や催しのほか、全学企画として十一日午後には、東京大学教授宮原誠一の「今日の学生——女子大生の思想と心理をザックバラに批判する——」の講演とシンポジウムが行われた。翌十二日には名古屋女子短期大学講師安川悦子と本学非常勤講師生松敬三を助言者に、全学シンポジウム「女子大生のあり方とその役割」、『キューポラのある街』の著者早船ちよの講演、他大学の学生も交えてのパネルディスカッション「女性対男性」などの、女子大学ならびに女子大生を考えようとする意欲的で多彩な試みが盛り込まれていたのである。古く学祖花蹊しげけん在世中に、毎年十一月二十五日に成蹊館女生徒試業と称して行われていた行事があった。八意思兼神やしろおもいかねのなみという学問の神の神号を掲げ、花蹊みずから祭主となり、祭典ののち生徒による国語漢文の朗読や揮毫きこう、学業成績品の展示などが

卒業式の日。卒業証書を手に管理棟の屋上に集
合した学生たち



あったという。そうした行事に由来する伝統の響きのうえに、新たな時代にふさわしい大学祭として紫祭は誕生したのである。

以後、紫祭は秋の主要な恒例行事となり、学園一三〇年、大学四〇年を迎える平成十七年には、第三八回紫祭を迎えることになる。

(1) 第一回卒業式の挙行とその時代

昭和四十四年（一九六九）三月二十五日。跡見学園女子大学は、記念すべき第一回卒業式を挙行し、国文学科一四六名、美学美術史学科一四七名、合計二九三名の卒業生を送り出す。

第一回の卒業生たちが入学したころには、キャンパスには土筆が萌え、校庭の一角には畑地が残り、跡見中学の一年生たちが女子大学見学をかねて芋掘り行事に訪れたという。管理棟の屋上では、苺を栽培して、学生たちと教職員が一人十数個ずつ分け合って食べたりする、牧歌的な一体感に大学全体

が包まれていたのである。

一年次にあつたのは、講義室と管理棟。その間にも、樋音高く、校舎建設が進められ、二年、三年と、年を追うごとに学生数も増加し、教室、講堂と次々に整備されてゆく草創期の大学を見守り、学生たち自身が自分たちの学生会をつくり、紫祭を開催し、その中で学んだ歴史の目撃者であり創造者が一回生なのであつた。

しかし、彼女たちをとりまく世の状況は安穏ではなかつた。大学が開学した昭和四十年（一九六五）以降、国際的にも国内的にも、若者たちが既成の価値の打破をもとめて、学生運動が熾烈になつてゆく時代にあたつていたからである。昭和四十四年（一九六九）五月に、文部省が発表した「大学紛争の現状」によれば、授業放棄または施設の占拠、封鎖中の大学は四三校。それが七月には、七五校に及んでいたのである。

本学は、そのような世の騷擾の動向を直接にうけることはなかつたが、次第に高まる世の学生運動に、本学においても学内に立て看板が出る風景が出現したりした。とくに同年十月二十一日の国際反戦デーに備えて、教授会は、対策委員会を設



置し、他大学の学生運動家の乱入による不測の事態に備え、学籍原簿を疎開させるとともに、当夜は、男子教職員が学内を警戒するなどの措置がとられ、平穏な大学の雰囲気維持されたのであった。

このような時代にあつて、一回生たちは、学生会やクラブをはじめ、すべてを自らの手で創つてきたわけであつた。学生たちの発意によつて話し合いがもたれ、担任教員も交えて、新たな事が試みられる。「何人集まるか」というところからスタートしたという。紫祭や体育祭などの行事もまた、そのような成果として実現したのである。さまざまな出身地のさまざまな事情から入学した一回生たちの、邂逅と結束こそが、大学の歴史を内側から切り開いた原動力であり、今日の女子大学を築く礎^{いしづえ}となり、開学式にうたわれた「紫の一もと」にちなんで、同窓会「一紫会」が結成されることになる。

(12) 飯野保学長の退任

開学から八年目。昭和四十七年（一九七二）九月十二日の第一〇五回理事会において、理事長飯野保は、後進に道を譲るために、本務跡見学園女子

大学学長および兼務短期大学長、兼務高等学校長および中学校長を退任する。これ以降、大学・短期大学・高等学校並びに中学校は、それぞれの機関において、学長あるいは校長を選出することになる。

大学においては、九月十三日、これまで学監であつた伊藤嘉夫が、学長事務取扱に就任し、さらに理事会は、規程の改正をへて、伊藤嘉夫を学長候補者として、跡見学園女子大学教授会に賛否を問うこととなつたのである。

かくして、九月二十五日の臨時教授会における候補者選出決議の手続きをへて、九月二十九日の第一〇七回理事会において、第二代学長伊藤嘉夫の選任が決定され、九月三十日に就任の運びとなる。また、飯野保は、学識経験理事となり、理事長として再任されることとなつた。

伊藤は、後に、飯野保を偲ぶ文章の中で、次のように回想している。

飯野先生とは、奥日光の山あるきをして、水筒の湯で、野立のお茶を嗜んだというよう
な思い出はあるが、それは例外でほとんど跡



見学園という場における、飯野先生であった。飯野先生は戦中自宅を戦火に焼亡、剩え一人子の俊秀真君の病死に遭い、失意、家郷いわき市への帰心が堅かつたのを、老校長跡見李子先生の、三顧の礼をとつての慰留に応えて、あえて跡見学園の復興と、進展に一身をささげられたのであつた。即ち、全焼の校舎の復興、増築。高女専攻科(三年制)、更に短期大学設置、ついで跡見学園女子大学の設立と、席も暖まらない年月であつた。その間多病、長時間の手術にも耐え、老人性結核も克服し、八十九才の長寿を保ち、着々とその成果をあげて今日の跡見学園をあらしめた人として、跡見学園女子大学初代学長飯野先生をまず最初にあげねばならないであろう。

『跡見学園女子大学学報』第七号

このように、初代学長飯野保は、跡見学園全体を統べる立場にあつて、学園の一時代を築いたのである。飯野は、各機関の長は退いたが、なお理事長の任にとどまつて学園のために尽力した。

(13) 伊藤嘉夫学長の就任

飯野保が、学長であると同時に学園全体の統括者であつたのに対して、伊藤嘉夫は、学監という立場から、大学開学の企画構想とその実現のための推進者となり、設立以来、一貫して大学における実質的な責任者として関わつてきたのであつたが、昭和四十七年(一九七二)九月に至り、学園の組織機構の改正により、名実ともに学長職に就任したということになる。

伊藤嘉夫は、明治三十七年(一九〇四)岐阜県に生まれ、立正大学専門部国語漢文学科を卒業後、竹柏会佐佐木信綱博士の門に入り、歌人としてはもとより、国文学、和歌史、ことに西行や百人一首の研究に従つて、後に文学博士となる。昭和十一年(一九三六)跡見女学校講師となり、昭和二十一年(一九四六)跡見高等女学校専攻科創設にあたり、学園の中枢にあつて、経営、教育の衝にあたり、昭和二十五年(一九五〇)跡見学園短期大学創設には教授となり、昭和三十二年(一九五七)跡見学園短期大学学監、昭和四十年(一九六五)跡見学園女子大学創設ともに、文学部教授となり、学監を兼ね、昭和四十七年以来、学長にあつたのであ

った。

この間、社会的には、昭和二十五年から昭和三十一年（一九五六）まで、文部省から短期大学教育課程等研究協議会委員を委嘱され、主査として国

文科、英文科の「教育課程標準」を作成し、昭和四十年から昭和四十六年（一九七二）までは大学設置審議会委員などをつとめている。

また歌人としては歌壇の選者として活躍する一方、和歌文学会を中心とする学会活動を通じて、数多くの学問的著作を残している。

昭和四十八年（一九七三）、東京都から教育功労者として表彰され、昭和四十九年（一九七四）には、勲三等瑞宝章を受章している。

昭和五十年（一九七五）定年退職を迎えてからは、客員教授として、主に作歌指導にあたったが、その長年にわたる業績に酬^{むく}いるために、昭和五十九年（一九八四）跡見学園女子大学における最初の名誉教授

に推されている。

(4) 不言亭の移築

明治八年（一八七五）神田中猿樂町に誕生した跡見学校は、明治二十一年（一八八八）に小石川柳町に移転、さらに昭和七年（一九三二）に大塚の地へ移る。この間、大正八年（一九一九）、花蹊八十寿を賀し、教え子たちの寄贈により、小石川柳町の校内に書院が建てられ、不言亭と名づけられた。不言は、「桃李、言はざれども、下、自づから蹊を成す」の句による、花蹊の別号である。

その後、書院は、大塚に移築され成蹊館（一八四十七年、跡見講堂兼体育館と本部棟の完成に伴い、解体撤去されたが、旧書院部分は、さらに新座の地に移築、再建され、学祖花蹊の余香を今日まで伝えている。それが可能となったのは、長く理事として学園に貢献した高橋精一郎の援助による。

不言亭の石碑は、かつて水と緑豊かな小石川柳町時代の校内にあつて、せせらぎに架^かけられていた石橋である。碑面の文字は、花蹊が、生徒たちに与えた彫^{おびた}しい数にのぼる直筆の習字手本のなか



不言亭と不言亭碑。石碑の背面には、飯野保による「不言亭縁起」（資料編参照）が刻まれている。

から集字したものである。石碑の背面には、飯野保の文による由緒が刻まれている。

その庭の木々は、心ある人びとの寄進によるものであり、昭和六十三年（一九八八）四月十日には、跡見校友会一紫会がその二〇周年を記念して、大学創設に深くかかわった伊藤嘉夫の歌を刻した歌碑を建立し、あらたに大学の歴史をも伝えるゆかりの園となった。

明治の昔、跡見学校は教育課程に点茶を取り入れ、学校茶道の先駆けをなしたが、現在、不言亭は、茶室として、茶道部だけではなく、芸術芸能実習（茶道）の授業にも利用され、跡見の伝統を脈々と伝える場となっている。

(15) 交通環境の整備

現在、跡見学園女子大学への最寄り駅としては、東武東上線志木駅と武蔵野線新座駅とがある。池袋から志木までは一八分、渋谷からは三六分。駅南口の西武バス跡見女子大行または所沢駅行の乗り場から約一五分、一方、新座駅北口からは大学専用のさくらのバス、約七分で大学キャンパスに到着する。

女子大学は、川越街道に接し、柳瀬川に望む丘

陵地に位置し、遠くに富士山を望む大学の自然環境としてはまことに恵まれた地にあるが、唯一の弱点は、駅から近いとはいいがたいことであった。大学開学当初は、東上線の志木駅のみが唯一の最寄り駅で、しかも現在とは反対側すなわち北口にバス停があつて、学生はそこから通学したのであつた。学生数も少ない昔は、本数も少なく、バスの便を断たれると、陸の孤島の感が深かつた。大学および学生会は、バス対策委員会の活動を通じて、長年にわたり、通学バスの本数増加、授業時間にあわせた時刻表の設定など、ねばりづよい交渉の結果、バス沿線利用者の増加もあつて、現在、通学にはいたって便利になつてきている。

しかし、長い歴史の間には、大学への主要な足であった西武バスに東武バスの参入計画に対して、西武バスが譲らないなどの業者間のかげ引きがあり、また満員ですし詰めめの状態が解消されない西武バスに対して、学生たちは会社側に署名活動などを通じ増発を求め、それは昭和五十四年（一九七九）の学生たちの乗車拒否による抵抗にまで発展した。学生たちは志木駅からタクシーに相乗りするなどの手段によつて改善を求め、その話題が



昭和四十年当時の西武バス



昭和五十六年頃の学バス



新座・大学間を走る現在の桜の学バス

新聞紙上を賑わせたこともあった。

ところが、志木駅よりは至便の地に、山手貨物線に代わる、東京外周部の工業団地の発展に対応するための貨物輸送の路線として武蔵野線が、昭和四十年度来、着工されることとなった。地元の人々は、この武蔵野線を推進するとともに、新座

駅の設置運動に熱心にあたった。その結果、昭和四十八年（一九七三）四月一日、国鉄武蔵野線の一部、すなわち新松戸と府中本町間が武蔵野西線として開通するとともに、新座駅と新座貨物ターミナル駅が開設されるにいたるのである。当初の発着本数は、日に上りが四一本、下りが四二本、朝夕は一五分間隔、昼間は四〇分

間隔と間遠ではあったが、大学は、ただちに新座・大学間のバスを設置して、あらたな学生たちの足の便を確保することとなった。

その後、武蔵野線は、昭和五十三年（一九七八）に新松戸から西船橋間が開通。さらに昭和六十一年（一九八六）から六十三年（一九八八）にかけて、京葉線が完成し、西船橋から先に延伸することになる。

このような武蔵野線の開通と拡充によって、大学への通学圏がいつきよに拡大されることに

なった。同じ埼玉県内の各線へのアクセスがしやすくなったことはもとより、千葉方面からの通学も便利になり、さらに神奈川方面からの便もよくなったのである。

現在では、朝の通学時や授業終了時にあわせて、新座と大学を結ぶ学バスが多数増発され、新座からの学バス利用は、通学者全体の六五%にまで達している。

(16) 入学定員の変更と文化学科の増設

大学は、昭和四十年（一九六五）四月、文学部国文学科、美学美術史学科をもって開学し、ついで昭和四十二年より英文学科を増設することによって、当初の大学構想を実現し、昭和四十六年（一九七一）三月には、初めて三学科の卒業生を送り出した。その年、昭和四十六年一月十一日には、女子大学文学部各学科の定員がそれぞれ一〇〇名に増員認可を得て、既存三学科の基盤はいっそうの増強、整備がなされたところであった。

かくして開学から八年の歳月を経たところで、文化の生成発展またはその様相の研究を通じて、総合的有機的に人間本質の探求を行うことを教育目的とする文化学科の増設を構想するにいたる。

文化学科の設置は、全国でも希少の先駆的な学科であって、既存三学科にあわせて、教育の新たな充実の方途がめざされ、教員組織、施設、設備、図書等のいっそうの拡充整備がはかれることとなった。

文化学科増設については、昭和四十八年（一九七三）七月十八日理事会において、当該学科の増設準備を行うことが議決され、これを受けて、大学は、時の学長伊藤藤嘉夫のもと、昭和四十八年七月二十日（金）・八月二十一日（火）・九月七日（金の三回にわたって文学部臨時教授会を開催、審議し、提案どおり承認する。この文学部決議ののち、昭和四十八年九月二十五日、第一一四回跡見学園理事会が開催され、議案「跡見学園女子大学文学部増設に係る学則一部変更に関する件」が理事長飯野保以下一〇名（欠席三名）によって、昭和四十九年（一九七四）四月一日を学科増設の開設時期として、決議されたのである。

昭和四十八年九月三十日に、時の文部大臣奥野誠亮あてに、跡見学園女子大学文学部文化学科増設届出書を、別紙書類とともに提出し、明くる昭和四十九年一月二十三日付（校大第一一の六一号）

キャンパスを彩る花々

昭和四十年（一九六五）の開学時は、本館（現一
号館）の第一期工事完成部分の校舎と、植えら
れてほごない芝生は緑なすにはほご遠く、キャン
パスの東南境に植えられた櫻や寄贈された桜
は、いづれもこれから生育する若木であつた。

まだ荒涼たる趣を残していたキャンパスに彩
りを添えていったのは、跡見学園校友会や女
子大学卒業生から寄贈された花々であつた。女
子大学開学時には、跡見校友会泉会の篤志に



一号館前の紫陽花



現在の中庭風景

より、九州の久留米つつじ二
〇〇〇株が寄贈された。これ
らのつつじは、現地から鉄道
便十八個に梱包されて、昭和
四十年三月二十六日に福岡県
久留米市草野町の仙花園から
発送、四月三日に女子大学に
届けられたものである。一〇
四種をそれぞれ二〇株ずつ、

計二〇八〇株に及ぶ多彩なつつじは、本館正面
玄関脇からグラウンドに沿つて植えられた。

また、泉会会長荏原まつ子から寄贈を受けた、
大正初年に渡来した北米原産の花みずぎの成木
五〇株は本館保健室前に、さらに昭和四十八年
（一九七三）の第五回卒業生寄贈の紫陽花八〇余
株は、本館の管理棟と呼ばれた校舎前のグラウ
ンド沿いに植えられ、女子大学の新しいキャンパス
の季節を年ごとに美しく彩ることになる。桜樹
の生育にともない、早咲きの山桜から種々の桜、
花みずぎ、つつじ、紫陽花と、早春から初夏に
かけて、色とりどりの花が、順に咲き続けるこ
とになるのである。

また、本館の中庭には、萩や茅かや、薄すすきなど『万
葉集』にみえる植物を植える趣向が凝らされ、
『万葉の庭』と呼ばれたが、のちに、第二十二
回卒業生（平成二年三月）の中庭泉池造成費の寄
贈により、現在みるような池ならびに噴水等が
設置されて、趣を一新した。



に、文部省大学学術局長名で、定員一〇〇名、収容定員四〇〇名の同学科増設の届出受理通知を受けることとなる。

このときにあたり、既存の教育課程に、文化学科増設にふさわしい授業科目が多数加えられたことはもとより、第四期校舎増築工事が完工し、鉄筋五階二二〇七平方メートル(七三〇坪)、すなわち一階会議室、研究室、二・三階図書室、四・五階講義室八が加わって、それまでのコの字型から中庭を囲んだ、今日の一号館の原形となる口の字型の校舎配置の姿が立ちあらわれる。さらに、設備、図書等の拡充もはかられ、跡見学園女子大学は、初期三学科に新たな学科を加えることによって、その後の文学部の基礎的形態を整えることになったのである。

専門科目担当の教員組織としては、既に就任している専任教授として、文化学科主任となった森園節生に蒲原春一のほか、あらたに専任教授として、杉勇(昭和五十年四月)、太田和彦(昭和四十九年四月)、助教として渡部武(昭和四十九年四月)、講師として新藤武弘(昭和四十九年四月)・植松明石(昭和四十九年四月)が就任するとともに、

多数の兼任・兼任の教授陣をそろえたのである。

昭和四十九年(一九七四)四月八日、第一〇回入学式は、文化学科第一期生をも迎え入れ、ここに四学科体制が確立して、大学発展の基盤が整ったのであった。

(17) 創世の時代から転換の時代へ

昭和四十九年は、跡見学園女子大学の歴史において多難の年であった。

社会では、労使関係の緊張が高まっていた時代であった。跡見では、四月八日に第一〇回入学式を迎えたものの、四月十一日から十三日まで国鉄・私鉄ともゼネストが行われた。大学では、当初、九月から十三日にかけて予定していた新入生オリエンテーションを、一週間延期し、十六日から十九日に学内で行った。と同時に、これを期に、学外施設を利用して行われてきたオリエンテーションの伝統がとだえ、学内で実施されることになる。学外におけるオリエンテーションは、その後、学科を主体として、断続的に復活して試みられたが、現在では、マネジメント学部がオリエンテーション期間の最後に行う一泊二日の跡見アカデミアが新たな伝統になっている。



大学は、既に開学から一〇年。学園の主導によって、発展の礎が固まってくるに及んで、それまでの教育諸条件優先のひずみは、折しもオイルショックによる物価の高騰が教職員への経済的負担として倍加して現れ、それは跡見学園女子大学教職員組合の結成へと繋がり、ことに教育研究環境の改善をめぐる確執は、組合と理事会との間に軋と緊張の時を生み出したのであった。

このような状況にいたって、学長であり理事であるところの伊藤嘉夫は、事態收拾のために、六月二十一日の臨時教授会において辞意を表明、二十八日、臨時教授会は学長の辞任を承認するとともに、跡見学園女子大学学長候補者規程を議決する。かくして、次期学長の選任を俟って、十月二十一日に正式に辞任することになる。

それは、創世の時代から新たな時代への転換でもあったのである。

2 大学の整備充実と発展

(1) 蒲原春一学長の就任

昭和四十九年十月十八日、学長候補者の選出が行われ、蒲原春一が選ばれ、十月二十二日に第三

代学長に就任する。

蒲原春一は、大正十年（一九二一）三月二十一日京都に生まれ、東京帝国大学理学部動物学卒業の理学博士。昭和四十一年本学に就任し、遺伝学の分野で顕著な業績をあげた研究者として知られていた。この間、大学院を経て、東京大学理学部の副手から助手となり、理学博士の学位を取得し、アメリカのワシントン州立大学動物生理学研究室に一年間勤務する経歴をへている。

跡見学園には、早く昭和二十二年（一九四七）に非常勤講師となり、昭和三十年（一九五五）には跡見学園短期大学の非常勤講師となっていた。昭和四十年（一九六五）には跡見学園短期大学教授となり、翌昭和四十一年（一九六六）に跡見学園女子大学の一般教育担当の教授に転じ、昭和四十九年の文化学科開設とともに、自然人類学担当の教授となった年に、伊藤嘉夫学長のあとを受けて、学長に就任したことになる。

後に、その当時を回想して、蒲原は「新しい講義と管理職を両立せねばならず、私にとって一番厳しい時期であった」（『跡見学園を去るにあたって』『フォーラム』第九号、一九九一年三月）と述

クラブハウス棟。その後、改修工事が加えられて今日の姿になった。



べるように、理事会と教授会との緊張の時代を、学長として送ったのである。

大学創立一〇周年の昭和五十年（一九七五）、文部省の指導要領の改訂後、最初の学生を迎えるにあたり、入学試験制度や教育課程の見直しが求められていた。それまで前期と後期の二回に分けて行われていた入学試験のうち、三月十五日に行われていた後期の入学試験が、三月九日に変更されたのをはじめとする改善策が講じられ、さらに教育課程についても、見直しがなされたところである。

学生たちの強い要望のもとに、新クラブハウス棟が実現したのも、この蒲原学長の時代であった。

なお、蒲原は、平成六年度春の叙勲において、勲三等瑞宝章の授与をうけている。

(2) 新クラブハウス棟の完成

大学開学と同時に創設されたクラブは、はじめ教室を利用してしたが、その活動の本格化にともなうて、現在グリーンホールの建つ一角に、クラブハウス棟が建てられた。だが、その建物は、学生の課外活動の拠点として十分な広さと設備を有

しているとは言いがたく、学生数の増大と相まって改善をもとめる声が高まり、学生たちによる学館建設委員会の発足へと発展する。学館建設委員会は、当初、クラブハウスを利用する各クラブから選出された委員によって構成されていたが、学館は、学生たちの厚生施設として全学生に関わる問題として捉え直す視点から、のちにはクラブを超えて広く学生たち一般にも呼びかけられた。

学館建設委員会は、十分な広さと数を有する部に、会議室、更衣室、シャワー室、食堂、喫茶室、談話室等の設備の整った総合的な学生会館の建設をもとめて活動を重ね、法人への質問状や、学長への要望書を提出した。さらに、学館建設新聞を創刊し、その活動の様子や、他大学の学館の現況を広く伝えることを試みた。昭和五十一年（一九七六）十一月発行の紙面には、同年の八月には、東京都学生会館主催の学館ゼミで、本学の学館連動の問題がとりあげられたことが報じられている。

こうした学生側からの要望を受けて、大学は、昭和五十三年（一九七八）四月に、新クラブハウス棟を現在の地に完成する。新クラブハウスは、四月八日に建設にあたった鹿島建設から大学へ引き



山崎一穎

渡され、十二日より学生の使用に供された。

これによつて、学生たちの課外活動は設備の整つた新しい拠点を得ることとなつたが、これを機に、学生たちの食堂や喫茶室を備えた学生の厚生施設の本格的充実への期待は、いつそう高まり、後のグリーンホールの建設に向けての動きも活発になるとともに、大学もまた、その実現へと内部努力をすることとなる。

(3) 山崎一穎学長の就任

昭和五十三年十月に、大学の草創期から転換の時代を担つた蒲原春一は学長の任期を終え、大学は本格的な改革の時代を迎えようとしていた。

その象徴的な出来事が、若き山崎一穎学長の選任である。

山崎一穎は、昭和十三年（一九三八）九月二十日長野県に生まれ、昭和三十七年（一九六二）三月早稲田大学教育学部国語国文学科卒業。その後、昭和四十五年（一九七〇）三月同大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程後期単位取得満期退学、同年四月に本学専任講師として着任し、昭和四十九年（一九七四）に助教授、昭和五十三年に教授に昇格したばかりであつた。

専門は、日本近代文学。当時は、森鷗外を対象とする精彩緻密な論考を次々に発表していた優れた研究者でもあつて『森鷗外・歴史小説研究』（昭和五十六年）『森鷗外・史伝小説研究』（昭和五十七年）をはじめ、数多くの著作があり、後年には、森鷗外記念館の常任理事、島根県津和野町森鷗外記念館運営協議会会長をも兼ね、平成十五年度には、『森鷗外・歴史文学研究』（平成十四年）でやまなし文学賞を受賞している。

昭和五十三年十月二十二日、四〇歳になつたばかりの、全国一若い学長が誕生したのである。

大学開学から一四年目。この年の三月に、昭和四十九年に増設した文化学科最初の卒業生を送り出し、文学部の四学科体制が定着したばかりであり、女子大学は草創期の時代から、いかに充実、発展の時代を切り開いてゆくかが求められていたのである。

大学運営、組織の刷新、さらに将来を見据えた、学生の厚生施設、体育館、独立図書館などの建設構想が新学長の大きな課題として待ち構えていた。

山崎は、第一次マスタープランの作成に着手し、綜・環境研究所に、教育環境・施設計画・教育内

一号館一階南側にあつたかつての食堂風景



竣工もないグリーンホール



容の三位一体となつた総合計画を依頼した。このマスタープランは、後に、大学における人と建築・環境のよりよい関係をめざして修正され、アトミファイルとして、昭和五十七年（一九八二）に開示されることになるが、こうした試みが大学の未来に長期的な展望を与えることになるのである。

山崎は、こうした施設充実を構想する一方で、一般教育課程を中心としたカリキュラム改訂に取り組み、大学教育としてリベラルアーツを重視し、そのうえに立つた専門教育を施す、地域に根ざした大学への確立を目標とした。それは生涯教育の一環としての公開講座の開設や大学主催の講演会などの開催へと繋がつてゆく。

山崎は、その後の跡見学園女子大学の基盤となる刷新を担つたといえよう。

(4) グリーンホールの完成

新クラブハウス棟の完成について求められたのは、学生数の増加に対応する学内の憩いの施設であつた。とりわけ、食堂は、当初、現一号館一階北側にあつたが、昭和四十九年（一九七四）に完成した第四期工事によつて増築された現一号館の南側に広げられていたものの、昼時ともなると、利



開講式で挨拶する岡野静二副学長

用者を収容しきれず、学生たちの間からは、独立食堂を望む声が高まっていた。

こうした事情を受けて、昭和五十四年（一九七九）、学生会館の建設が決定する。建設地として、キャンパスに調和し、基本設備の設営が容易で学生・教職員が利用しやすいことが考慮された結果、正門を入ってすぐ右手の西武バス停留所前、校舎とクラブハウスに面した一区画が選ばれた。設計は現代建築研究所、建築は鹿島建設。昭和五十五年（一九八〇）七月一日に起工式が行われ、同年十二月十五日竣工する。新たな学生会館は、学生たちの意見集約のもとに、「グリーンホール」と命名された。

建物は鉄骨造りで、外壁の色は名称の由来となった淡いグリーン、一階一〇四三・六四平方メートル、二階六四〇・五四平方メートル、塔屋一七・四一平方メートル、総面積は一七〇一・五九平方メートル。一階は、五〇〇席を用意した食堂、二階には、発足まもない跡見学園女子大学生活協同組合の売店、ブルールの絨毯が敷き詰められた喫茶ラウンジ、さらにラウンジに隣接した集会室が二部屋、それに棟屋のテラスが設けられた。食堂・

喫茶が憩いの場となったのはもちろんのこと、新しい集会室は学生や教職員の会議・会合等に利用され、学内の交流促進の場ともなった。開館時間は、当初、食堂・生協の営業時間に準じていたが、学生たちの強い要望を受けて、現在では、八時〇〇分から一九時三〇分となり、放課後も余裕をもって利用されている。

(5) 大学主催公開講座の開始とその歴史

大学の将来を、学部教育を充実させることと、地域社会に開かれた大学へと育ててゆくことに求めようとする方針は、昭和五十五年秋には、公開講座の開講へと実現してゆく。折から、生涯学習社会の到来を迎えようとしていた時代にいち早く応えるとともに、地域社会との交流を深めるうえで、公開講座の意義と役割には大なるものがあったということが出来る。

今日にまで及ぶ公開講座の第一回は、「美と芸術の周辺」と題して、昭和五十五年十月十八日（土）から十一月十五日（土）までの五週にわたり開催された。その開講式には、埼玉県教育委員会、朝霞地区教育委員会連合会の代表者らが招かれ、新座市長の祝辞を得たのち、一〇講座に及ぶ講義が開



始された。

講義は、久保光志講師「芸術の力」と三山進教授「鎌倉武士と仏像―運慶を中心に―」を皮切りに、以下、安達啓子助教授「宗達と光琳」、福原淳助教授「ルネッサンス期の音楽(Ⅰ)(Ⅱ)」、福部信敏教授「ギリシャの古典美について―パルテノンを中心―」、大高保二郎講師「バロックの巨匠たち―絵画を中心として―」、丹尾安典講師「肖像画と自画像」、鄧健吾成城大学教授「敦煌の美術」、三山進教授「近世の仏像―新座市の作品を中心に―」に及ぶ充実した内容であった。

初めての試みであったにもかかわらず、公開講座の受講申込者は二二五名の多数にのぼり、五日間の延べ人数では、八〇〇人ほどが受講した。受講者は、一八歳の女子学生から八〇歳の高齢者まで、年齢はもちろん職業もさまざまであったが、男女別では八割以上を女性が占めた。また、地域としては、大学周辺が中心で、特に三〇代から四〇代の主婦の多数参加があったが、なかには遠隔地から足を運んだ受講者もあった。久

し振りに母校を訪れ懐かしむ卒業生の姿や、親子夫婦で共に学ぶ姿なども見受けられ、会場は真剣な眼差しに満ちあふれ、公開講座が地域社会からいかに求められた企画であったかを証するものとなったのである。

その後、公開講座は、関係者の努力と受講者の熱意に支えられ、軌道に乗り回を重ねた。一四年目を迎えた平成五年(一九九三)には、さらなる拡充と刷新が図られ、教養講座と実践講座の二本立てとなり、春期と秋期の年二回の開講となった。従来からの講座は教養講座に衣替えし、テーマ内容を絞り、連続性を持たせた二講座を秋期に開講することにした。新たに開講された実践講座は、まさに時代の要請に応えるもので、英会話とパソコンセミナーの二講座が春期と秋期の年二回開講されることになった。

平成十二年(二〇〇〇)、公開講座は二一年目を迎えるにいたっているが、この年度と第一回目の昭和五十五年度との受講者のデータ比較が残っている。それによれば、この間、受講者の数は二〇〇名余から六〇〇名余へと三倍増となり、ますます活況を呈していたことがわかる。性別では実践

一号館四階旧講堂における体育の授業風景



講座の開講によるものと思われるが、男性が一三%から二三%に増加し、年齢では高齢者の参加が増え、五〇代以上が一%から四一%となり、生涯学習がいかに社会のなかで定着しているかがうかがえる。また職業別では、これも実践講座の開

講によるものと推測され、会社員・公務員・

教員など、職業人の受講が二〇%から四二%に増加し多彩になっている。公開講座は、大学の内部充実を地域社会へと還元、交流してゆく企画として今日に及んでいるのである。

(6) 体育館の落成

昭和五十五年(一九八〇)のグリーンホールの完成によって、旧食堂跡は、翌年、研究室に姿を変え、ひとつの研究室を二人の教員で利用できるよう改善が図られた。

ついで、昭和五十八年(一九八三)三月には、理事会・評議員会で待望の独立体育館の建設が承認された。

女子大学は、屋外での体育実技には広いフィールドに恵まれていたが、屋内で体育実技を行う場合には、校舎四階の講堂(現



現在の体育館俯瞰図

一四〇三講義室)を利用していた。しかし、学生数の増加とともに、椅子の常設されていないフロア前方のみで行う実技には無理が生ずるようになっていた。特に、屋内実技の中心であった創作ダンスは、各グループが自由に踊ればぶつかることもあり、支障をきたす状態になっていたのである。

学生数の増加によつて、講堂としても、もはや充分な広さとはいいがたくなっており、入学式や卒業式では、学生を入れると、列席する父母たちは式場からあふれ出る状態になっていた。こうして、講堂をも兼ねた体育館の建設は、学生・教職員が強く求めるところとなつていたのである。

昭和五十五年(一九八〇)に教職員と学生代表による体育館建設委員会が発足してから三年の歳月が過ぎ、念願の体育館建設が着工されるに至つたことになる。

設計は現代建築研究所、建設は鹿島建設。起工式は昭和五十八年(一九八三)九月二十二日、竣工式は昭和五十九年(一九八四)七月六日。その間、冬には記録的な雪に見舞われたこともあり、少し遅れての竣工となつた。場所は、正門を入つて左手の、グラウンドの向こう側、外壁はキュービツ

クオオレンジ色のブロックで覆われ、玄関と採光に配慮した窓は透明ガラス、四隅に三八メートルの長大なブリッジをかけ、柱を一切用いていないのが特徴である。一階は広いアリーナとその周囲のギャラリースタンド、正面にステージがあり、二階にはジョギングコースが設けられた。照明・暖房にも工夫を凝らした、快適な施設の誕生であった。

こうして、新しい体育館は、体育実技やクラブ活動などに活用され、入学式、卒業式などの諸行事にもゆとりをもつて利用可能な場として、学生たちの心と身体を育む場となるのである。

(7) 一紫会の歴史と創設二〇周年記念事業

昭和四十四年(一九六九)三月二十五日、跡見学園女子大学の第一回卒業式にともない、やがて卒業生による同窓会が結成され、学歌「紫の一もと」の歌詞にちなんで、卒業生が一つの紫のもとに集う、という意味をこめ「一紫会」と命名された。その後、昭和四十六年(一九七二)には英文学科卒業生を、さらに昭和五十三年(一九七八)には文化学科の卒業生を会員に迎え入れ、一紫会は次第に規模の大きな組織へと発展し、活動もさかんに

伊藤嘉夫の歌碑



歌碑除幕式風景



つてゆく。

同窓会や紫祭でのバザー開催などをはじめとする行事はもとより、女子大学の施設完成などに際しては、一紫会から記念品等が寄贈されている。

女子大学創立二〇周年にあたっては、大学側と協

議のうえ、一紫会奨学金を設置したことは、後進の学生たちのために明記すべき貢献であるといえよう。昭和六十年（一九八五）五月に、その第一回募集が行われ、六名の奨学生が決定するが、日本育英会の基準では救済できない学生の援助を目的とするところに大きな意味がある。こうした地道な活動を積み重ねて、跡見校友会一紫会は、昭和六十三年（一九八八）春に創設二〇周年を迎えるのである。

創設二〇周年を記念して、昭和十一年（一九三六）より長く跡見学園に奉職し、大学の設立に尽力した伊藤嘉夫の歌碑が不言亭の庭内に建立され、同年四月十日に、歌碑の除幕式と祝賀会からなる記念式典が行われた。

歌碑には「三十年のいのち旺（おとせ）なる巨き楠（おむす）

春はことしの新芽さす見ゆ」と刻まれ、その序幕は、女子大学第一六回生で、孫にあたる広瀬直美があたり、窪田章一郎、何初彦らの来賓とともに、伊藤の恩師である佐佐木信綱の孫であり、本学の教授でもあった歌人の佐佐木幸綱も祝辞を述べ、八三歳になる伊藤も挨拶の席に立った。

以後も、一紫会は、同窓会など諸行事の企画を



はじめとして、さまざまな活動を行い、現在では各地に支部会も結成され、二万人をこえる卒業生たちを束ねる役割をはたし、全国規模の同窓会組織として基盤を固めている。

平成十五年(二〇〇三)には、新座キャンパス緑化のために多額の寄付金を贈呈し、女子大学発展への貢献も続けている。

3 時代に応える大学への変貌

(1) 嶋田英誠学長の就任

平成元年(一九八九)七月十一日、昭和五十三年以来、学長の任にあつた山崎一頼は三期目の任期を待たず辞任する。その後を受けて、学長に選出されたのが嶋田英誠である。

嶋田英誠は、昭和二十年(一九四五)東京に生まれ、昭和五十年(一九七五)に東京大学大学院人文科学研究科美術史専攻博士課程を経て、東京大学東洋文化研究所の助手の任にあつたが、昭和五十四年(一九七九)七月、女子大学に専任講師として着任、昭和五十八年(一九八三)に助教授、同六十二年(一九八八)に教授に昇格した。専門は、中国絵画史の研究で、『中国絵画図版目録稿』のよう

な膨大なリスト作成作業のうえに立って、宋・明代を中心とする中国絵画に関する緻密な業績を積み重ねている。

嶋田が、前学長の後をうけて、学長職に就任したのは四四歳の時であつた。翌平成二年(一九九〇)十月二十一日には任期満了を迎え退任することとなり、学長就任期間は短期間ではあつたが、この間に女子大学のその後の教育・研究環境を決定する重要な決断を下すことになる。

新学長は、開学二四年目を迎えていた女子大学を評して、「二四歳と言えば、大学は今瑞々しい青年時代の唯中にあり、かつ自らの一生をしかと見据える時期にきた」という認識のもと、改革に取り組んだ。特に、施設・設備面での対応を早急に実現することが山崎前学長時代から懸案となつており、差し迫つた課題であつた。嶋田も、「この時代に真に要求される教育のために」「学生・教員の十全の研究のために」「豊かな学生生活のために」という三つの「ために」を念頭に、さまざまな施設・設備の充実を図ることこそが、女子大学の教育・研究基盤を確立するうえで不可欠であることを提言し、実現に向けて努力を重ねた。

具体的には、独立図書館の建設、コンピュータ教室・視聴覚(AV)教室・LL教室の新設と各種設備・機器の整備、新しい教室・研究室棟の建設、学生寮の新築、が当面する施設設備面での構想であり、その実現が求められていたのである。

これらの事業は、平成二年が学祖跡見花蹊生誕一五〇周年、女子大学開学二五周年に当たることから、その記念事業として、同窓生からも寄付を募り、徐々に実現されていくことになる。

(2) 情報処理室から情報メディアセンターの設置へ

大学の組織も教育も、情報化社会の要請に 대응することが求められる時代がやってきていた。そしてその整備と充実は、急速にはかられることとなった。

平成三年(一九九一)、組織としての情報処理装置室が設けられ、その室長には中谷幸弘があたり、文学部のなかの教少ない理系教員として、情報処理教育のための基礎を築く。同年、情報処理装置室(現第1コンピュータ教室)と情報処理準備室が設置

され、「パソコン一般教育セミナー'91」を初めて開催する。

平成五年(一九九三)には、第1、2、3 LL教室、LL自習室、LL準備室を設置。やがて、各学科にもコンピュータが置かれ、ネットワークが、旧学術情報センターを通じ、ノード校東京大学に接続されて、教職員の使用希望者にコンピュータが配備され、しだいに情報教育環境の基盤が整えられるようになってゆく。

その後、平成十年(一九九八)には、第2情報処理装置室(現第2コンピュータ教室)が、ついで、同年十月には、情報処理室はマルチメディア教育センターとなり、教育教材作成ラボと、マルチメディア教育室を新たに設けた。前者では、デジタル画像編集(動画・静止画)ができ、学生が自由に使える画像編集システムが五台用意され、後者では、パソコン五台を設置した自習専用のパブリックゾーンがあり、それまで情報処理の合間しか使えなかったコンピュータが、開室時間内の好きな時間に使えるようになった。

さらに、平成十一年(一九九九)には、第3情報処理室(現第3コンピュータ教室)、平成十二年(二



観葉植物の置かれた第三自習室でコンピュータを使用する学生



〇〇〇)に第4、5情報

処理室(現第4、5コンピュータ教室)を設置し、初めてティーチングアシスタントを配置した。

情報処理は、平成十一年度からは、必修科目となり、全学生にメールアドレスが配布された。

同年は、学内基幹業務のシステムならびに図書館のシステムが稼働され、職員一人にコンピュータ一台の環境が整備されて、学内のOA化が進められた画期的な年となった。

平成十四年(二〇〇二)の全学改組にともない、マルチメディア教育センターの機能を拡大して、「情報メディアセンター」を設置し、情報サービスクラスが新たに設けられた。情報処理装置室は名称をコンピュータ教室と改め、第6、7コンピュータ教室が設置され、センター長には副学長の嶋田英誠が着任した。情報メディアセンターは、組織運営の拡大と充実によって、情報をめぐる研究教

育の拠点となったのである。

さらに、コンピュータを導入した教育・学習・研究をより強化するために、平成十五年(二〇〇三)には、文学部の伊藤穰、マネジメント学部の花岡照明を情報メディアセンターの兼任教員として迎えた。また同年には、三号館一階に、観葉植物が彩りをそえるゆつたりとした室内の丸テーブルにパソコンの置かれた、学生のための第三自習室もオープンし、三号館の随所に設けられたインタラクティブ・スペースにも、パソコンが配置された。こうして授業の教材をホームページで提供することも可能になり、学生たちは、気軽にいつでも自習できる環境に恵まれるようになったのである。

現在、情報メディアセンターは、「機械の顔」ではなく、「人間の顔」をもった組織として、新時代を迎えた跡見学園女子大学の中核的な機関として機能するようになっていく。

(3) 学生寮の移転と跡見学園学生寮の開寮

昭和四十年(一九六五)の女子大学開学に伴い、新座キャンパス内には、遠隔地から入学する学生のための新座寮が準備された。現在の二号館から

跡見学園学生寮



跡見学園学生寮の室内



図書館の裏庭にかけての場所である。開学に間に合わせるべく用意されたのは合宿舎横の仮設寮であったが、翌昭和四十一年（一九六六）四月には、鉄骨ブロック混合二階建の寮が完成する。広さは約二〇〇〇平方メートル（約六〇六坪）で、収容定員は一三四名。学園には、戦後、小日向・錦糸町・目白・音羽・西ヶ原に寮があつたが、新座寮は学

内にある女子大学専用の寮であり、通学時間のかからないのが利点であり、舎監のもと、学生たちの親密感を生み出す場となつたのである。

しかしながら、時代の変化とともに、複人数の相部屋で浴場も共同という設備は、寮生たちが快適に生活できる環境へと対応を迫られていったのである。

そこで大学は、学内の新座寮は、平成二年（一九九〇年）七月をもって閉寮し、同年九月に新たな寮を、東上線志木駅と女子大学の間に位置する、野火止の閑静な住宅地の一面に建設し、短期大学と共用の「跡見学園学生寮」を開寮した。

新たな寮は、鉄筋コンクリート三階建、建築延べ面積三五六〇・五〇平方メートル、収容定員一三三名。居室は洋式の個室で、一六・二平方メートル（四・九坪）。各部屋には、ユニットバス、トイレの設備があり、ベッド、机、椅子、チェスト、クローゼット等の家具が備えられ、冷蔵庫、エアコンにテレビ配線も完備している。共用施設としては、一二〇席の食堂、談話室、作法室、レッスン・ルーム、裁縫室があり、各階にはコイン・ランドリー、湯沸かし器、電子レンジ、コンロ付きの流し台、物干し場が設置されている。食堂では、平日は朝食、夕食、日曜祭日は、朝食の提供が可能である。共用施設では、希望者は茶道・着付等の習い事もすることができる。プライベートは守られ、一方で寮生の仲間同士の交流もできるのが、新たな寮の大きな魅力である。この寮は、単に寝食の場としてだけでなく、豊かな大学生活をいとなみ、同時に人間としての成長も温かく見守る場として、機能することになった。快適な新学生寮は好評で、卒業までの四年間を、寮で暮らす学生も多くなった。こうした寮生活の絆は強く、卒業後も交流を続けている人たちが多いという。



古く歴史をさかのぼれば、明治八年（一八七五）の跡見学校の昔から、「お塾」とよばれる寄宿舎があった。自宅以外の在校生たちが、学年をこえて生活をともにし、そのかけがえない交流を通して人間として成長していくのは、学祖跡見花蹊の重んじた教育の精神である。「お塾」は、震災と戦災を経て場所を変えながら、花蹊没後も、昭和四十年代まで続いた。こうした一三〇年の伝統のうえに、跡見学園学生寮は、寮生の人間性を育む大事な温床として、いまでも跡見学園に生き続けているといえよう。

(4) 一八歳人口の急増・激減のための臨時的定員増への方策

時代は、いわゆる団塊の世代の子供たち、すなわち第二次ベビーブーム世代の大学進学期を迎えようとしていた。一八歳人口の増加と大学進学率の向上から、既存の大学定員の

ままでは、収容しきれないことが懸念されていた。しかも、その増加の波の後には、一八歳人口が減少期を迎える。そこで、時の文部省は、恒常的定員増とは別に、期限を設けた多数の増員を認める方針を打ち出した。これが、臨時的定員増である。文部省は、各大学の定員増を「大学設置基準」「期間を付して収容定員を増加する場合に関する取扱方針」という、ふたつの文書によって判断し、あるいは指導をする。各大学は、定員増申請以前に大学設置基準を満たしていること、その上で取扱方針を満たしていることが求められた。

本学は、平成二年（一九九〇）七月から臨時的定員増に向けて、文部省と折衝を重ねた。その結果、平成三年度から平成十一年度に至るまで、国文学科・英文学科の定員を各一八〇名、収容定員を各七二〇名とし、美学美術史学科・文化学科の定員を各一六五名、収容定員を各六六〇名とした。したがって、この間の四学科収容定員は、二七六〇名となる。同二年九月二十八日付で提出した臨時的定員増申請書類は、受理され、同年十二月二十一日付で文部省の認可がおりた。

臨時的定員増は、国の大学教育施策に応じたも



のであるが、それは、増加した学生たちに対応する大学の設備と教育内容の充実へと振り向けられる好機となった。

しかしながら、臨時的定員増の措置は、やがて終焉の時を迎える。のちに文部省は、臨時的定員増終了後の大学の選択すべき方策を求めてくることになる。

それは、一八歳人口の減少、女性の社会進出、実学志向という動向を見据え、二一世紀に社会が要請する大学刷新のありかたが求められる前夜のことでもあったのである。

(5) 和田英道学長の就任

平成二年十月二十二日、嶋田英誠学長の任期満了による退任のあとを受けて、学長に和田英道が就任した。和田学長は昭和十九年(一九四四)熊本に生まれ、昭和四十八年(一九七三)三月立教大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程を終えたのち、国文学研究資料館助手の任をへて、昭和五十一年(一九七六)四月に女子大学に専任講師として着任、昭和五十四年(一九七九)助教授昇格、昭和五十九年(一九八四)教授に昇格する。この間、昭和五十三年(一九七八)十一月より学生部次長

(同五十五年十月まで)、同五十七年(一九八二)十一月より事務局長(同六十年十月まで)を歴任し、学長就任は女子大学に着任して一五年目、四六歳の時であった。任期満了に伴い学長を退任したのは、平成六年(一九九三)十月二十一日である。

和田英道の学長就任時期は、戦後の第二次ベビーブーム世代の大学進学期を迎え、女子大学としては臨時的定員増を行いながら、一方でその後の一八歳人口の急激な減少をも視野に入れ施策を進めていかなければならない時期にあたっていた。

和田は「本学の有する存在意義の第一」は、「跡見女学校以来培ってきた肌理細か家庭的な温かみのある教育」であるとし、このような教育を基盤にした女子大学の改革によって時代の要請にこたえようとした。

施設面では、山崎一穎、嶋田英誠学長の時代からの懸案であり、計画が進められてきた図書館と二号館が完成し、充実の度を加えた。短期大学との間で単位互換制度が発足したのも、和田学長の時期であった。そして、留学制度の発足を念願としていた和田学長によって、学生たちにアメリカ・イギリス両国への海外語学研修の道が開かれたこ



とを忘れるわけにはいかない。

和田の専門は日本中世文学、特に軍記物を研究対象として『明德記 本文と基礎的研究』ほか数多くの業績を残す一方、野球部の顧問として、全日本女子大学野球連盟の初代会長をつとめ、今なお全国大会における敢闘選手には和田賞が与えられている。

和田英道は、その学長としての後半期は病氣と闘いつつ職責を全うしたが、平成九年（一九九七）一月十七日、宿痾しゅくおの病魔のため五二歳の若さで亡くなる。葬儀は、大学葬としてしめやかに挙行された。席上、弔辞を述べた山崎一穎元学長は、和田が中世文学を専攻した理由をたずね、大学生の時に母を亡くした体験、そして病氣との長い闘いの時間を振り返り、その人生観が中世文学に流れる無常観と呼応したことに求めたが、さまざまな分野において惜しまれながらの旅立ちであった。

(6) 新図書館の完成

平成二年（一九九〇）は、学祖跡見花蹊生誕一五〇年、女子大学の開学二五周年を迎えたが、その記念事業の一環として、同年末には建築の運びとなり、平成四年（一九九二）六月一日、待望の新図

書館が開館する。独立図書館の建設は、昭和六十二年（一九八七）五月の理事会で決定し、図書館建設委員会で基本構想が検討されてきたものであった。

図書館の歴史をさかのぼれば、開学当初の図書館は、現一号館の三階、自然科学研究室（のちの生物研究室）の上にあたる三階の一角を占めていた。その後、第四期工事が完成すると、増築された南側の校舎の二階・三階が螺旋階段らせんで繋がれた図書館となった。学術雑誌のバックナンバーを積極的に収集するなどの特色を打ち出し、図書が増加には集密書架の導入などによって対応し、年度とともに、内容・規模の充実が加えられた。

しかし、校舎内に組み込まれたスペースでは、発展期を迎えた大学の蔵書充実や利用者の増加には、やがて対応できなくなってくる。閉架書庫を建設して一時をしのいだが、図書館は、教育・研究の中枢をなす、大学の心臓部ともいえるべき存在である。校舎が完成し、新クラブハウス棟・グリーンホール・体育館の落成をみた後に、独立新図書館が切望されるのは、充実をめざす女子大学の歩みとして、当然のなりゆきであった。

図書館外観
入り口手前にキャノピー
がみえる



図書館の内部



新図書館は、校舎側に面した、グラウンド沿いの桜並木を意識して設計された。設計は日本設計、建設は鹿島建設。平成二年八月八日に着工、平成四年二月末に竣工した。建築面積二二二三・八三七平方メートル、延床面積五二三〇・四九三平方メートル、鉄筋コンクリート造り地上三階建、塔屋一階。フロアは絨毯敷き、一階のエントランスを入ったメインカウンターの部分は、三階までの吹き抜けで、自然光を生かした明るい印象の空間である。吹き抜けの天井

からまっすぐ下へのびる、チューリップ型の照明も、工夫が凝らされたつくりである。

一階には、メインカウンター、目録コーナー、レファレンス書庫、閲覧席などがあり、視聴覚資料を二人で利用できるAVコーナーは、新図書館の画期的な試みであった。そのほか、一階には、事務部門などがあり、入り口右手には展示資料室が設けられ、最初の展示会として「近世以後名家筆跡展―跡見花蹊を中心に―」が開催された。以後、随時、企画展示が行われている。二階には、書庫・閲覧席に、貴重書庫と専用閲覧席があり、AV機器に対応する一五四席の視聴覚室ホールは新図書館の売り物のひとつであり、グループ学習室三室も設置された。三階には、書庫と大きな窓に沿った閲覧席に、教員閲覧室、会議室、多目的室が設けられている。

入り口は、八角形のキャノピー(Canopy) 天蓋、建築用語では天蓋形のひさしの意味)があり、新図書館のシンボルとして設計・建築された。大学の正門を入ると、桜並木とその下に連なる紫陽花の向こうに、このキャノピーが眺望でき、四季折々の美しい景観のなかに、新図書館のシンボル



が浮かび上がるように、配慮されている。これにちなんで、図書館の機関誌の名称を、創刊号より続いた『図書館報』から、同年十月三十一日発行の二一号より『キャノピー』と改め、現在に至っている。

新図書館には、板谷春子揮毫による扁額が寄贈され、掲げられている。図書館の落成により、大学として必要な施設は、ほぼ整い、旧図書館跡はL・L教室等になった。次に、研究棟である新館（現二号館）建設が計画されることになる。

(7) 海外語学研修の実施

平成四年度には、本格的な海外語学研修制度が始まった。この年は、大学の国際交流元年ともいふべき年にあたる。

平成四年（一九九二）三月末、アメリカに向かつて旅立った和田英道学長は、マサチューセッツ州のマウント・ホリオーク大学とオハイオ州のケニオン大学を訪れた。夏期に、本学学生のための、短期留学制度を発足させることを目的としての渡米であった。

訪問先のマウント・ホリオーク大学は、ポストン郊外にキャンパスを構える自然環境に恵まれた

女子大学である。女子教育の伝統を継承する大学として有名であり、学問的レベルの高い大学として知られる。一方、ケニオン大学はオハイオ州の州都コロンバスから車で四〇分、緑豊かな学園都市ガンビアにある。第一九代大統領ヘイズを生み、映画俳優ポール・ニューマンの母校でもある。『ケニオン・レビュー』というアメリカ文学界をリードする学術誌を五十年以上にわたって編集発行していることでも知られ、多くの作家・詩人を輩出している大学である。

両校との交渉は順調に進展し、本学学生の受け入れのための提携が結ばれた。それを受けて、平成四年の夏期休暇期間には、語学研修を希望した学生たちがアメリカへ向かって旅立つこととなった。教員の引率のもと、七月二十五日には、ケニオン大学に向けて一三名の学生が、七月二十七日には、一七名の学生がマウント・ホリオーク大学に向けて機中の人となった。

ケニオン大学での研修は、七月二十五日から八月十七日まで。七月二十五日、ミネアポリス経由でコロンバスに到着した一行は、一路、ケニオン大学へ向かった。宿泊には大学寮を利用したが、



ロンドン大学ロイヤル・ホロウエイ校

ウィークエンドにはホームステイの日が企画されていた。翌二十六日は、オリエンテーションとキャンパスツアー。二十七日から語学研修が始まり、八月十五日まで行われた。研修の内容は、週五日、一日四時間の英会話レッスンと、ケニオン大学教授によるアメリカ文化諸領域につ

いての特別講義が、一回一時間三

〇分、計四回行われた。研修以外のアクティビティも用意され、ウィークエンドホームステイのほか、アーミッシュ村やコロンバス市街の見学、そして最終日には修了証授与式とさよならパーティーが行われた。八月十六日、デトロイト経由で帰国の途についた一行は、アメリカでの多くの思い出を胸に、翌十七日無事成田に着いた。

一方、マウント・ホリオーク大学での研修は、七月二十七日から八月十八日まで。語学研修、アクティビティともに、ケニオン大学と同様の内容を備えたもので、当

大学でも学生たちは充実した日々を過ごし、一回り大きく成長して帰国した。

アメリカの両大学における夏期語学研修は、成功裡に終了した。これを受けて、平成五年度には語学研修先をさらにイギリスにも広げるため、和田学長は平成四年の十月にはロンドンへ向けて旅立っている。

イギリスで語学研修を提携した大学は、ロンドン大学ロイヤル・ホロウエイ校である。英国王室と密接なつながりを持ち、ウインザーの森に宮殿さながらの威容を誇る同大学は、百数十年の歴史を数える伝統ある名門校である。

こうして、平成五年度には、アメリカ二校、イギリス一校の計三校による海外語学研修が可能となった。

海外語学研修は回数を重ねるに従い内容の充実が図られたが、学生たちの希望と研修先の成果を見計らいつつ、現在では、大学はロンドン大学ロイヤル・ホロウエイ校一校に絞るとともに、その交流を深めつつ、平成十三年度には同校との間で在学留学制度を発足するに至っている。

在学留学制度は、四月から翌年三月までの一年

間、女子大学に在学したままでの留学となるため、四年間での卒業が可能となる。留学中に修得した単位は、三六単位を上限に大学の卒業要件単位として認定されるのである。また、留学期間中の学費は減額されるため、経済面でも支援する制度となっている。

以後、ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ校における夏期語学研修と、在学留学の二本立てで国際交流の機会が在學生に与えられ、国際感覚を身につけた多くの學生たちが育っている。

さらに平成十七年(二〇〇五)には、中国の上海大学との語学提携が進められ、英語圏のみならず、中国語圏との大学交流も実現する運びとなった。

(8) 短期大学および他大学との単位互換制度の発足と交流の促進

平成五年度に実施された新カリキュラムから、女子大学と跡見学園短期大学(平成七年度より跡見学園女子大学短期大学部)との間で単位互換制度が発足した。両大学間で開放した講義科目の単位を互換するこの制度の導入は、両大学における既存のカリキュラムの効果的な活用によって、多様化する學生の学修に対する要求に応えようとす

るものである。

また、これは開かれた大学作りの一環として実施されたもので、女子大学在学中に他の大学・短期大学で単位を修得できる条件整備に向けて、一步を踏み出した改革でもあった。当時の教務部長は、「今後、真摯な教育に対する相互の信頼を基礎に協定さえ取り交わすことができれば、跡見学園短期大学のみならず、国内の他の大学・短期大学との間にも単位の互換は可能ですので、本学としては今後この制度を慎重かつ大切に育て、開かれた大学作りの柱の一つとするつもりです」と、その意気込みを語っている。

そして、実際、平成五年(一九九三)に踏み出されたこの一步は、のち平成十三年(二〇〇一)の「彩の国大学コンソーシアム」の設立によって、翌春から他の九大学との間で単位互換が可能となり、大きな歩みに繋がってゆく。

「彩の国大学コンソーシアム」は、埼玉県西部にキャンパスがある大学が中心になって、教育ネットワークを形成するために設立されたものである。その目的は、各大学が連繋して協力体制を築くことにより、教育研究の高度化・進展を図り、



学生にとってより価値の高い学修活動の場を提供するとともに、社会の成熟化にともなう学修需要の増大や社会・経済の急激な変化に対応するための生涯学習の機会を設け、また産官学の地域交流の推進を図ることなどにおかれている。活動としては、教育交流、研究交流、学生交流、教職員交流、地域交流などがあげられ、このうち教育交流の一環としてそれぞれの大学との単位互換制度がスタートした。

単位互換が可能となったのは、十文字学園女子大学、城西大学、駿河台大学、西武文理大学、大東文化大学、東京家政大学、東京国際大学、東邦音楽大学、文京女子大学の九大学である。女子大学では、三六単位を超えない範囲で、卒業要件の単位として修得することができるようにしている。

(9) 新館(現二号館)の完成

学祖跡見花蹊生誕一五〇周年、女子大学開学二五周年を記念して、数年来にわたり学園全体の施設や設備の充実がはかられてきたが、平成五年(一九九三)四月三十日、記念事業の総仕上げとして女子大学の新しい新館の建設工事が竣工の運びとなった。

新館の建設は、平成二年、嶋田英誠学長の時代



に、前学長山崎一穎のあとを受けて、教育・研究施設のより一層の充実を目指し、研究室の改善、教室の整備に関する基本的な計画が立てられ、その後、和田英道学長に引き継がれ実現したものである。

当初の計画では、延床面積三二〇〇平方メートルの予定であったが、臨時的定員増に伴う学生数の増加を考慮して教室が追加され、延床面積は五〇〇九平方メートルの規模の建物となった。建築面積は一四六四平方メートルで、大学のシンボルとして遠くからも眺望できるように高層化され、鉄骨鉄筋コンクリート造りの七階建とされた。屋上からは秩父山系や丹沢山系、そして富士山の姿が遙かに望まれ、眼下には雑木林が広がり武蔵野の面影を偲ばせる。

新館の外観は、同じく跡見花蹊生誕一五〇周年記念事業で建設された跡見学園中学校高等学校の校舎棟や、女子大学図書館の建物と調和したデザイン・色彩となっており、エントランスのジンバブエ・ブラックの敷石をはじめ、目立たないところにも細やかな配慮がなされている。前庭のシンボルには、広井力の手になるモニュメントが寄贈



された。

新館には、専任教員の研究室のほか、各学科研究室、面談のための談話室などが設けられた。また、約三〇〇万円の国庫補助を得て設置された視聴覚教室には、情報化時代にふさわしい最新鋭の機器類が装備された。さらに当初より、一階の講義室二部屋を改装し、資料室兼展示室とすることが予定されていたが、それは平成七年（一九九五）に花蹊記念資料館の開館として実現することになる。

新館の完成披露式典は、平成五年九月二十五日に、本学と関係の深い大学、高等学校、工事関係者等を招待して行われた。完成記念に、一紫会から寄贈を受けた新館前の樹木は、現在キャンパスに彩りをそえている。

平成十四年（二〇〇二）、新学部の誕生などによる新校舎の竣工によって建物の呼称がナンバー制になったとき、新館は二号館と呼び名を改められた。



跡見学園女子大学の桜

跡見のシンボルは桜であり、桜は大学のもうひとつの歴史でもある。

女子大学の開学にともない、広い新座キャンパスに桜が植栽された。女子大学の桜は、開学時の昭和四十年（一九六五）に高山雄三郎によって寄贈されたことに始まる。高山の娘千鶴子は、昭和三十三年（一九五八）三月跡見高等学校卒業（泉会Ⅱゆかり会）、ついで同三十五年三月跡見学園短期大学家政科卒業（九期生）、

引き続き生活芸術科に進学したが、惜しくも昭和三十六年四月七日夭折した（『刺なきばら』）。父雄三郎は、愛娘の学んだ跡見学園に寄与することによってその冥福を祈念し、伊藤嘉夫の所望を受け、女子大学に山桜の苗木を寄贈した。

桜の苗木の選定と調達は、円山公園のしだれ桜をはじめ、世界の桜を手がける、京都の桜守として著名な、佐野藤右衛門に委ねられた。開学直前の昭和四十年二月、佐野の栽培になる苗木二四七株が、特別仕立ての自動車で女子大学に搬送された。

その後、昭和五十五年（一九八〇）十二月には、グリーンホール落成にあわせ、第一三回卒業生からソメイヨシノ三本が寄贈され、グリーンホール前に植栽された。また、平成三年（一九九二）に財団法人日本花の会からソメイヨシノ一〇本とサトザクラ「イチヨウ」三一本の苗木を得、平成十三年にはオオヤマザクラ（ベニヤマザクラ）六本がスクールバス停留所近辺に植栽された。跡見学園を象徴する桜は、こうした篤志の賜物として、新座キャンパスに、根づいていったのである。

しかしながら、大学をとりまく内外の事情の変容にともない、グラウンドを囲む桜も、そのままでは保存が難しくなった。平成十二年秋、新生跡見の誕生のために川越街道側キャンパス



用地に新校舎を建設するにあたり、グラウンド北側の山桜・ソメイヨシノの一部は伐採を余儀なくされることとなった。しかしながら、御衣黄(緑色の桜)など一部の貴重な桜はキャンパスの一隅に移植され、さらに、伐採された山桜も一紫会と木工作家齊藤満宏の尽力により、一〇台のベンチと記念品のコースターとして生まれ

変わる。ベンチは、平成十五年に、三・四号館に設置され、コースターは、平成十三年十月および平成十五年十月の一紫会同窓会参加者に、記念品として配られ、好評を博した。

これらの桜についての調査は、開学初期からしばしば行われてきたが、長らく生物学を担当した山崎博子を中心とした同定調査は、特筆すべきものである。この調査は、平成五年から同十五年までの一〇年間にわたり、富山県中央植物園の大原隆昭、東京都立大学理学部牧野標本館の堂園いくみの協力を得て行われた。地道な作業の結果、現在、合計一六六種の桜が植栽されていることが明らかになった。その成果は、『跡見学園女子大学紀要』三七号(平成十六年三月)に発表されたが、パンフレット「跡見学園女子大学の桜」として広く一般にも提供され、女子大学ホームページにも掲載されている。現在では、キャンパス内の桜樹一本一本に、名札がつけられ、その標本は牧野標本館と花蹊記念資料館に収められる予定である。

山崎が女子大学の桜の研究を手がける頃から、学外から、桜の樹木医である池本三郎が招かれ、



その治療が行われるようになった。治療の作業には、大変な労力を要するため、山崎生物学研究室、環境整備課職員に、さらに学生たちが加わった。二号館裏のしだれ桜、合宿舎前の松月などは、数度にわたる手厚い治療により、見事に咲き返った桜樹である。

また、本学の御衣黄は、希少な純粋種であり、それが、池本の紹介により、跡見花蹊と親交の深かった原三溪ゆかりの三溪園に植栽された。

三溪園の白雲閣の御衣黄が枯れてしまったため、

純粋種の女子大学の御衣黄が寄贈されることになったのである。平成十五年十月三十一日、三溪園五〇周年記念式典にあわせ、山崎博子をはじめ、環境整備課員や学生たちも参加し、白雲閣において植樹式が挙行され、「跡見学園女子大学」の立て札が立てられた。

開学当初、わずか、人差指ほどであったという小さな苗木は、日々見守り続けた多くの人々の献身的な愛情によつて育まれ、キャンパスの象徴にふさわしい見事な桜樹に成長した。

平成十七年四月十日、大学は、最初の「桜まつり」を開催し、桜をめぐる人々に広く開放し、構内の案内と桜の解説には学生たちがあつた。折から爛漫と咲き誇る時節の日曜日に加えて、新聞報道などもあつて、訪れた人は一八〇〇人にも及んだ。

跡見学園女子大学の桜は、学生のみならず地域の人々の温かな心にこたえ、未来にむけて、美しく咲き続けてゆくであろう。